

貨幣経済と武士

今から 300 年以上前の江戸時代。元禄 15 年 12 月 14 日に江戸市中を騒然とさせる事件が発生した。

そして、その事件は現代まで語り継がれている。

そう、赤穂浪士による吉良邸討ち入りである。

12 月 14 日は旧暦の表示であるから、現在の 1 月 30 日に当たる（国立天文台 日本^の暦日データベース <https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/caldb.cgi>）。

冬の関東地方は西高東低の安定した晴天の日が続くが、年を越える頃には、南岸低気圧が度々通過することがあり、大雪をもたらすことがある。

この時も地面には降り積もった雪が厚く覆い、十五夜間近の満月の光を明るく照らし、襲撃には絶好の状況であったろう。

さて、この事の発端は、ご存じのように元禄 14 年 3 月 14 日 江戸城松之廊下で赤穂藩主浅野内匠頭長矩が、高家筆頭吉良上野介義央を切りつけた事が原因である。

これにより、浅野内匠頭は即日切腹、赤穂藩は取り潰しとなった。

そして、この幕府の裁定に不満を持った赤穂浪士が翌年本所松坂町*の吉良邸に討ち入りをかけ、吉良義央を殺害するにおよんだ。（*討ち入り当時、松坂町という地名は無かったとも云われている）

浅野内匠頭が刃傷に及んだ原因については謎とされている。

歌舞伎の仮名手本忠臣蔵では、塩冶判官（浅野内匠頭に比定）の妻である絶世の美女顔世御前に対する高師直（吉良上野介に比定）の横恋慕が原因となっているが、あくまでも芝居のストーリーであり、現実には考えられない。

（なお、この高師直（こうのもろなお）と云う人物は実在の人物であり、非常に興味深い人物である。いずれ、このブログでも取り上げるかも知れない。）

この事件の謎を解くヒントは2つ在ると思う。

一つ目のヒントは、これが浅野長矩にとって二度目の勅使饗応役であったことである。

事件の起きる 18 年前の天和 3 年にも勅使饗応役に任命され、この時は同じ、吉良義央とのコンビで大役を無事に果たしている。

二つ目のヒントは、事件が元禄時代の末期に起きた事である。

日本では、家系の格式が非常に重視される。

勅使饗応役に任命されるのは 1～2 万石程度の大名であり、戦国時代に活躍した武将の末

裔が多く、高貴な血筋を持った大名は少ない。

日本で最も血統の良い天皇家から勅使を迎えるに当たって、どこの馬の骨か分からない人に接待を勤めさせる訳にはいかない。

現在の感覚では判り難いが、現在なら総理大臣や文化功労者などが、宮中に招かれ天皇陛下に拝謁することはあるが、当時は四位より位の上の人しか宮中に上がることは出来なかった。

そこで、天皇家の儀式に参加出来る程の格式正しい血筋を持った人間が必要になってくる。徳川幕府に於いて、儀式や典礼を指導する役職として、高家と呼ばれる名家の血筋をひく旗本がおり、吉良家はこの高家の中においても筆頭であった。

現在でも、例えば、貴方が優秀な営業マンであり、会社の業績を大きく向上させるような大きな商談を纏めてきたとしよう。大きな商談であるから、最終の段階で相手の会社の部長なり、事業部長なり、あるいは社長が出てくることになる。

ここで平社員の貴方が自分一人で交渉を纏めてはならない。この案件に関して理解しているともいなくとも、必ず、こちら側も部長なり事業部長なり、相手側の役職と同等の人を同席させて交渉を纏めなければならない。

そして、「自分の力ではどうにも成らないところを、部長にお出まし頂いたお陰で無事、交渉を纏める事が出来ました。有り難う御座いました」と、礼を言わなければならない。

日本に於いては、実力より肩書きや地位が重要な場合が在り、それが相手に対する礼となる。

吉良家も代々、この儀式典礼の介添えを行ってきた訳であるが、親切心で無料で指導していた訳では勿論無い。

そこには、相応の謝礼の受け取りがあった事だろう。

そして、この謝礼の受け渡しは米による支払いでは無く、現金による支払いであったろう。これが吉良家の大きな副収入となっていたことだろう。

懐の豊かな吉良家では苛烈な年貢の取り立ても必要無く、所領の三河では名君と慕われている。

さて、第一回目の勅使饗応役の際に、五百両支払われたのか、千両支払われたのか、あるいはもっと支払われたのか分からないが、浅野内匠頭も無事大役を済ますことが出来た。

さて、時代は下って二回目の饗応時、元禄時代は平和な時期が続き、商活動が一気に盛んとなり、インフレの時代となっていた。

元禄時代の初期と末期では物価が3倍に上昇していたと云われる。

逆の言い方をすれば、貨幣の価値は元禄時代の初期と比べて三分の一に減少していた。

しかし、武士は貨幣経済に生きてはいない。

武士の俸給は米によって支払われ、米 100 俵は 100 年経っても米 100 俵のままである。日々の生活の支払いに汲々としている下級武士なら、この金銭感覚は理解出来たであろうが、藩の重役を務める上級武士には分からない。彼らの感覚では米 100 俵が永遠に米 100 俵であるように、金 1000 両は永遠に金 1000 両である。従って、過去の記録に従い、一回目と同額を支払ったのであろう。

とは言え、吉良上野介としても、武士として、「これでは足りない」と、はっきり口にすることは出来ず、婉曲的に迫ったことであろう。しかし、赤穂の田舎侍は吉良の言うことが理解出来ない。報酬を三分の一に値切られたと思った吉良上野介は、すっかりヘソを曲げてしまい、おざなりにしか浅野内匠頭に協力しない。

勅使を迎える当日の朝になっても姿を見せない吉良上野介を、江戸城内を必死になって探し回っていた浅野内匠頭が、ぼったり顔を合わせたのが松之廊下。問い詰める浅野内匠頭に対して、小馬鹿にした態度をとる吉良上野介に、ついに怒りが爆発して、刃傷に及んでしまう。

この事件は貨幣経済に生きる吉良と貨幣経済を理解出来なかった浅野の悲劇と思います。